No. 25 (2001. 12. 20) ISSN 0919-343X

# 日本線虫学会ニュース

## Japan Nematology News

目 次

◆数は力か（近藤栄造）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
◆事務局から
第９回線虫学会大会報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第４回線虫学会議（FICN）開催案内および開催に向けての支援要請・・・・・・・4
◆線虫学メーリングリスト「NEMANETJ」開設のお知らせ・・・・・・・・・・・・・・・5
◆2002年度日本線虫学会大会（第10回大会）のお知らせ・・・・・・・・・・・・・・・6
◆記　事
自己紹介と大会参加の感想（九石寛之）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
日本線虫学会熊本大会に参加して（熊谷典道）・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
パラグアイ農業総合試験場訪問記（植原健人）・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
インドネシア滞在記（小林義明）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

## 数は力か

**近藤栄造(佐賀大学)**

前号のこの欄で、「時間」という切り口から、線虫研究について簡単に述べた。今回は、数（量）という切り口から、少し述べてみたい。

数には大きな意味がある。数は、ある値を境にして、質に転換する。境界値を下回ると、質を維持するのが難しい。簡単な話、人が減り過ぎると、仕事を進めるのが困難になる。逆に、境界値を超えると、余裕が生まれ、能率が上がり、発展する。さて、線虫学会の現状は、どうであろうか。学会の柱である、大会と学会誌を中心に見てみよう。

### 1．線虫学会大会

現時点における線虫学会の正会員は、約260 名である。会員数がこの値であることの意味は深く考察する価値がある。しかし、ここでは、団体会員、外国講読会員、賛助会員を加えた約 330 名で学会は構成されているという事実に基づいて見ることにする。

平成 13 年 10 月 18 日～20 日に、第 9 回線虫学会大会が熊本市国際交流会館で開催された。参加者数は約 70 名で、正会員の約 27%に当たる。この率は、高いのか、低いのか。判断は難しいが、期待は、もちろん、より多くの会員に参加していただくこと。そのためには、大会参加の意義・メリットを多くの会員に感じていただくことが必要である。ここでの問題は、口頭発表、聴講、質疑討論、歓談など大会ならではの良さは、参加した人しか実感できないこと

である。参加者には、大会参加の意義を周りの会員に伝えていただきたいと思う。やや宣伝臭いが、佐賀大学線虫学研究室の院生と学部学生の全員が熊本大会に参加した。教室では絶対に得られない刺激を受けたと思う。参加すること、経験することのもつ力を感じる。

熊本大会は、九州沖縄農業研究センター線虫制御研究室のスタッフと熊本県在住の学会会員の尽力ならびに参加者の協力を得て、参加者数以上の成果が挙がった。質疑応答が活発であったことは、その端的な表れである。数の不足をチームワークで乗り越え、質に転換した結果と言える。

数が少ないと「顔が見える関係」をつくることが容易である。個人的にも話しやすい。線虫学会は、今しばらくの間は、この長所を活かすことが必要だろう。

## 2．学会誌

大会参加の特徴が臨場感にあるとすれば、学会誌の特徴は「場」を越えることにある。印刷公表された論文は、海を越えて、時代を超えて、読まれる。定着性の劣る学会講演に留まっている限り、このメリットを享受できない。だが、実体として、線虫学会では、放棄者がかなり多い。大会における口頭発表の多くがそのまま埋もれ、学会誌に論文として掲載されていない。

一般的には、見る、聞く、読む、書くの順に負担は大きくなる。「見たり、聞いたり」の負担は軽いが、時間とともに消えて行く運命にある。それ故に、口頭発表は論文執筆よりも心理的圧迫が小さい。そして、このことのプラスの意義は小さくない。発展途上の研究成果を聞いてもらい、質疑応答を介して研究遂行上のヒントをもらい、論文完成への道を歩むことができる。問題は、最後の段階、論文執筆の段階にどうつなげていくかだ。

「研究は、学会誌に論文が掲載されるまでは終わらない」ということを再認識したい。積極的なご投稿をお願いしたい。線虫学会誌の発展・充実は、一重に、皆さんからのご投稿にかかっている。

## 3．「数」に関わるその他のこと

### 1）FICN 参加者への支援

社会の色々な面で国際化が進み、国と国の間の垣根が低くなり、垣根が無くなってきた。インターネットで瞬時に外国と結ばれる今、日本線虫学会の活動も、「世界の中の日本」を意識しなければならない状況にある。数年前から学会としての対応を求められてきた FICN 参加者支援も、そのような流れの中に位置づけられると思う。世界における線虫研究の現状はどうなっているのか、今後何を目指すか、また、その為には何をなすべきか。これらのことと無関係に日本線虫学会の位置は計れない。

このような観点から現状を見、今後を展望した時、「なんとかしなければ」との思いは募る。この思いに応える一つのことは、試験研究者の裾野を、国内はもとより国際的にも広げることだろう。経済的理由で国際学会への参加が困難な国々の線虫研究者を支援することは、巡り巡って、線虫研究全体の体質を強化する。一定数以上の線虫研究者を養成することは、線虫研究発展の大きな要件であり、大きなステップとなる。このような考えの下に、線虫学国際連合の一員、それも、世界的に見て決して小さくはない一員として日本線虫学会は、会員のご理解を得て、途上国からの参加者に対する応分の支援をすることになった。日本における国際線虫学会議の開催の可能性を含

めて、日本線虫学会が国際的にさらに発展する契機に FICN 支援がなればと願う。

FICN 支援については、本ニュースに別途記してあります。ご参照下さい。

2）科学研究費の細目区分

本年の 11 月 16 日に、日本学術会議の「植物防疫研連委員会」が東京で開かれた。その席上、文部科学省の科学研究費補助金の「系・分野・分科・細目」の変更（案）が紹介された。最も目についたのは、「植物保護」という細目がなくなり「応用昆虫」に変更されたことである。変更にあたっては、応募件数（実績）が考慮されたという。植物の生育阻害要因としての有害線虫や、病害虫防除手段としての有用線虫に関する試験・研究の重要性を、実績で示すことが求められている。ゆとりのない時代に入ると、「数は力」という局面が増える。線虫に関する試験研究に携わる私たちは、その点に心したい。

3）小委員会の設置

線虫学会は、会員の投票で選出される役員等によって運営されている。前号のニュースで一部紹介したように、小委員会が学会内に複数設置され、当面の懸案事項の解決に向かって努力している。学会役員が、得意な面を中心に分担して対応することによって、会員から付託された学会運営を円滑に進めるためである。時間的制約が大きく、必ずしも目的が順調に達成されているとは言えない。とはいえ、上記の FICN 支援についての論議と対応をはじめ、学会ホームページの改革と運用、論文投稿に関わる課題の洗い出しと投稿促進、実験書の内容の練り上げ等が関係者の努力で進められている。

会員の皆様には、学会活動全般について、忌憚のないご意見・ご要望を、学会事務局または会長宛にお寄せ願いたい。

## ［事務局から］

### 第９回線虫学会大会報告

1．熊本大会開催される

第９回線虫学会大会が、2001 年 10 月 18 日～20 日に熊本市で開催されました。18～19 日に熊本市国際交流会館で開催された講演会では、28 題の一般講演のほか「植物寄生性線虫レース研究の現状と課題」をメインテーマとしたシンポジウムが開かれ、シストセンチュウ、ネグサレセンチュウ、ネコブセンチュウのレースに関する４題の講演が行われました。20 日には、熊本県の中心的な施設園芸地帯の植木町とサツマイモの主産地である大津町、阿蘇をコースとした現地見学会が開催されました。大会参加者は 83 名でした。大会開催にご協力をいただきました、熊本在住の会員の皆様にお礼申し上げます。

2．評議員会・編集委員会合同会議報告

標記合同会議は 2001 年 10 月 18 日９時から約３時間半、熊本市国際交流会館で開催されました。会議の大要は下記の通りです。詳細と総会の報告は、学会誌 31 巻に会報として掲載します。

1）2000 年度会務報告と会計決算報告、2001 年度事業計画案と会計予算案が事務局から報告され、一部字句等を訂正のうえ、承認されました。会議では、会誌の年２号発行が基本であり、そのために投稿を促がす必要があること、ニュースレターは年４回の発行を目指すこと、1998 年以前の会費未納者に対しては継続確認と納入督促を行ったうえで退会者とすること、団体会員については、講読不可の場合は会員から削

除することが確認されました。
2）英文投稿規定作成小委員会において、海外からの投稿促進を目的に作成された英文投稿規定案が山中委員長から提案され、ネイティブの添削を受けたあと学会誌に掲載することが承認されました。また、これに関連して、和文投稿規定の「規定1」を「投稿者は原則として本会員に限る。ただし、非会員も、原著論文、短報に関わらず、一編 4,000 円を支払った場合に投稿できる。」に、「規定9」を「別刷は 50 部を贈呈する。それ以上は著者負担とする（1部 100 円）。 希望部数および表紙の要否は原稿の第1ページの上段に朱記する。」に改定し、短報の制限ページも、刷り上がり2ページから3ページに変更することが承認されました。
3）外部への日本線虫学会の案内、活動の広報、線虫学や線虫についての啓蒙、線虫学会会員相互の情報や意見の交換を目的に、ホームページ編集委員会で作成されたホームページ改革案が二井委員長から提案され、承認されました。
4）実験書刊行委員会の真宮委員長から、実験法の内容と構成案について説明があり、発刊することが再確認されました。
5）前年度の総会で、日本の若手も含めてアジアの該当する研究者を支援するために、第4回国際線虫学会議（FICN）へ資金を拠出することが承認されていますが、実務担当の Dr. Vrain から届いた最近の要請はこれまでの経緯と食い違うことが石橋 FICN 支援対策小委員会委員長から説明され、FICN の方針を再確認した上で拠出額を決定することが承認されました。
6）日本動物分類学関連学会連合で本学会の代表をしている荒城評議員から、同連合が植物分類関連学会と連合することに伴い、日本分類学会連合（仮称）へ発展的に移行することが説明され、本学会がこの分類学会連合に加盟することが承認されました。
8）小倉編集委員長から、第 31 巻は、1号・2号の合併号とし、論文6編、文献目録、第9回大会の講演要旨を登載するとの報告があり、承認されました。また、①学会誌に賛助会員のリストを載せること、②第 10 回大会の記念事業として、学会誌表紙の改訂、会誌名の変更、ロゴマークの公募を行うこと、③学会誌に掲載する論文のプライオリティーを考慮して、掲載論文の末尾に、「原稿受領日（received）」を記すことが合意されました。
9）その他に、次期大会を「第 10 回記念大会」と位置づけて、2002 年 10 月中旬につくば市の文部科学省研究交流センターで開催する予定であることが、大会事務局を担当する荒城評議員から報告されました。

**第4回線虫学会議（FICN）開催案内および開催に向けての支援要請**

第4回国際線虫学会議（FICN）が 2002 年6月8日～13 日にスペイン領カナリア諸島のテネリフェ(Tenerife)で開催されます。正式のプログラムはまもなく届くことと思われますが、彼地はアフリカの北西海上に位置する火山島で、風光がすばらしい観光地のようです。日本線虫学会からも多数の参加が期待されます。

この国際会議の開催に当たり、この会議を開催する IFSN（国際線虫学会連合）から、財政基盤が弱い国から参加する線虫研究者を支援（参加費 300 ドルの半額を支援）するために、援助金の拠出が各国の主要線虫学会に対して要請されています。これはこうした国からの線虫研究者の参加を

促し、線虫研究の国際的な活性化と発展を図ることがねらいと思われます。

本学会としてもこの国際会議を支援するために応分の拠出をすることが、先の2001 年度総会で承認されています。これに関して評議員会では具体的な支援策を第9回紙上評議会で検討し、以下の方針を決定しました。

1）本学会からイタリア線虫学会並みの1,500 ドル（参加費半額支援として 10 人分に相当）を拠出する。

2）拠出金は、会員からの寄付と差額を本学会会計から支出することで賄う。

3）日本線虫学会ニュース次号に FICN の案内と寄付を募集する記事を掲載する。

つきましては、FICN 支援のために一口1,000 円の寄付を呼びかけますので、主旨をご理解の上、ご協力をお願いいたします。送金は、2002 年1月末までに郵便振替口座（口座名：日本線虫学会、口座番号00170-6-610102、学会費等との混同を避けるため、払込用紙の通信欄に FICN 支援寄付及び口数を必ず記入）までお願いします。

## 線虫学メーリングリスト「NEMANETJ」開設のお知らせ

このたび線虫学メーリングリスト（ML）を開設しましたのでお知らせします。

先の日本線虫学会熊本大会において、ML開設の促進と支援・協力が決議されたのを受け、11 月8日に「NEMANETJ」を開設しました。これまで、世界中の nematologist が参加できる、英語を共通語としたML（NEMA-L@crcvms.unl.edu など）は既に存在しましたが、「NEMANETJ」では日本語での気軽な意見交換を目的としています。

「NEMANETJ」は日本線虫学会専用MLではありません。線虫について学んでいる学生、研究している線虫学者のみならず、線虫に興味を持つ人すべてに幅広く参加していただき、活発な意見交換をしていただきたいと思います。もちろん、日本線虫学会からのお知らせに利用したり、日本線虫学会について（会誌や大会のことなど）議論するのも自由です。管理・運営は当面、下記の3名が行います。

12 月1日現在、登録者はまだ 30 名程度です。まだ登録されていない方は、下記の方法にて登録をお願いします。また、日本線虫学会会員以外にも幅広く参加を呼びかけていますので、皆様のお近くに線虫学について興味を持っている方がいましたら、お声をかけていただければ幸いです。

線虫学メーリングリスト
発起人＆管理人
奈良部　孝（北海道農研）
narabu@affrc.go.jp
相場　聡（中央農研）
aiba@affrc.go.jp
岩堀英晶（九州農研）
iwahori@affrc.go.jp

－NEMANETJ 会員になるためには－

登録は自動で行います。
<nemanetj-ctl@ml.affrc.go.jp>宛へ、本文に subscribe <ローマ字書きの自分の名前> と書いたメールを送ってください。"<",">"は不要です。題名（Subject）や署名

（Signature）等も不要です。
(例) subscribe YAMADA Taro

おりかえし、入会確認のメールが送られてきますので、そのメールに指示された内容を本文に書いて<nemanetj-ctl@ml.affrc.go.jp>まで返信してください。正常に登録されれば、Welcome メールが届きます。
注) HTML 形式のメールでは正常に処理できないことがあります。必ずプレーンテキスト形式で送信してください。

NEMANETJ の詳細については、日本線虫学会のホームページ http://www.affrc.go.jp:8001/senchug/ml/nemanetj.html でご確認下さい。登録がうまくいかない、あるいは NEMANETJ に関する質問等がありましたら、<nemanetj-admin@ml.affrc.go.jp> までどうぞ。

## 2002 年度日本線虫学会大会（第 10 回大会）のお知らせ

**大会事務局**

2002 年（第 10 回）日本線虫学会大会を下記の通り開催します。詳細については現在大会事務局と学会事務局で検討中です。大会案内及び講演申込み要領は 2002 年 4 月発行予定の本会ニュースに掲載します。2002 年日本線虫学会大会に関するご意見・ご質問は、下記大会事務局へお願いします。

会期・会場：
平成 14 年 10 月 10 日（木）～11 日（金）
総会・一般講演・懇親会
茨城県つくば市竹園 2-20-5
文部科学省研究交流センター
国際会議場
（第 8 回大会の会場と同じです）
http://www.mexttci.go.jp/index_j.html
平成 14 年 10 月 12 日（土）
一般公開記念シンポジウム
茨城県つくば市竹園 2-20-3
つくば国際会議場
エポカルつくば（予定）
http://www.epochal.or.jp/

10 月 12 日（土；午前・午後）は会場をつくば国際会議場エポカルつくば（予定）に移し、日本線虫学会 10 回大会を記念する一般公開シンポジウムとして実施する計画です。

大会事務局：
〒３０５－８６０４
茨城県つくば市観音台３－１－３
農業環境技術研究所　生物環境安全部
線虫・小動物ユニット　荒城雅昭
TEL：０２９８－３８－８２６９
FAX：0298-38－8199，8269
e-mail：arachis@niaes.affrc.go.jp

## ［記　事］

### 自己紹介と大会参加の感想

**九石寛之**
**（栃木県農業環境指導センター）**

初めまして。新会員になりました九石（さざらし）です。一風変わった苗字ですが、地元の栃木県でも数えるほどしかいません。しかも、すべて親戚です（笑）。初対面ですと、まず「さざらし」と読んでくれません。私も他人だったら「九石＝さざらし」とは読めないと思います。現在は栃木県農業環境指導センターに勤務しています。栃木県では平成 12 年度の組織改編で、

病害虫防除所と肥飼料検査所が統合してこのような名称になりました。もともとは病害の担当でしたが、これから線虫被害が多くなることが予想されましたので、9月から11月まで中央農業総合研究センターの線虫害研究室に研修でお世話になっていました。線虫屋さんになって、まだ3ヶ月の駆け出しです。皆さんにいろいろとお聞きする事が多いので、なにとぞよろしくお願いします。

10月に日本線虫学会第9回大会が開催されました。研修中ということもあってか（？）、電話で栃木に問い合わせたところ、「行ってもいいよ」との上司のＯＫサイン。感謝しつつ、熊本行きの飛行機に乗りこみました。飛行機に乗るのはこれで2度目。妙に緊張していました。後ろの座席の老夫婦がそれに気づいてくれたのか、「飛行機は初めてかい？」と話しかけていただき、リラックスムードで熊本に到着しました。

研究成果の発表は、初心者の私にとってとても勉強になりました。植物寄生性だけでなく自活性や昆虫寄生性、食菌性線虫や線虫寄生菌など線虫世界の広さに圧倒されてしまいました。

特に印象に残っているのは、最終日に行なわれたエクスカーションです。熊本がメロン、スイカやカライモ（サツマイモ）の産地であることは学生時代に学んだ地理で知っていました（でもサツマイモ＝カライモは知りませんでした）が、どれも栃木県にあまり馴染みのない作物だったので、栽培方法や病害虫の防除体系のイメージがなく、どのように作っているのだろうとワクワクしていました。サツマイモ農家の古庄さんの説明を聞いたときに、消費者との契約栽培だということで驚きました。またいろいろなことを試されており、勉強熱心さを見習わなければならないと思いました。ご馳走になったおまんじゅうが美味かった。

栃木県の農業試験場や普及センターには、線虫に明るい人がいません。これからもっと深く学び、役立つ情報や技術を農家に提供していきたいなと考えています。また、栃木県にいらっしゃったときは、ぜひ御一報ください。各種圃場・山・森林・河川・名所旧跡から有名店・夜の街まで観光案内します。これからよろしくお願いします。

**日本線虫学会熊本大会に参加して**

**熊谷典道（日本園芸生産研究所）**

新規入会の熊谷です。私は千葉県松戸市にある（財）日本園芸生産研究所でメロンの育種を行っています。ここでは、その他にトマト・ピーマン・カボチャ・キュウリの品種改良も行っていまして、将来はネコブセンチュウ抵抗性育種に着手しようと思っています。そこで、抵抗性育種に関する手法を学ぶため、農業技術研究機構中央農業総合研究センター虫害防除部線虫害研究室の水久保さんのもとに研修（８～９月）に行きましたが、その折りに線虫学会第9回大会を知り、参加して見ようと思いました。

初めて線虫学会に参加したのですが、研究会の雰囲気は良く、発表内容も幅広くて楽しく勉強ができ、感激しました。日頃ネコブセンチュウしか馴染みがなかったので、これまで聞いたこともない線虫の発表を拝聴して、とても興味を持ちました。参加者のみなさんも、とても親切で私がちょっと分からなかったり疑問だったりしたことを聞くと丁寧に説明してくださり、嬉しかったです。

エクスカーションでは栽培現場の土壌病害問題や対策を知ることができ、たくさん

得るものがありました。特に印象深かったことは、メロン栽培圃場で線虫被害が出ていなくても土壌消毒を行うと言うことでした。メロンは線虫に感染されると品質が極めて悪くなってしまうので無消毒栽培を嫌う現実と、出来れば農薬を使いたくない理想とのギャップに複雑な思いでした。育種屋として、私は抵抗性品種の重要性を意識しました。この他にも、D-D 消毒２回処理によってネコブセンチュウの被害がうまく抑制できていること、土壌深層部にもネコブセンチュウが存在すること、阿蘇山にキタネコブセンチュウが生息していることなどを知り、本当に内容の濃い見学会となりました。

このような学会を運営された事務局の皆さん、親切だった参加者の皆さん、たいへん楽しかったです。ありがとうございました。

**パラグアイ農業総合試験場訪問記**

**植原健人（北海道農研）**

パラグアイでご活躍の清水さんの研究のお手伝いとして、2000 年 11 月 17 日－12 月 22 日にかけておよそ 1 ヶ月間、パラグアイ、アルゼンチン及びブラジルを訪問して、おもにネグサレセンチュウを中心に調査して参りました。まず、はじめに南米に訪問することが決まってから、なんとなく１人で行くのに不安感があり前年にパラグアイに滞在された奈良部さんにいろいろとお聞きして、有益な情報を仕入れさせていただきました。さらに、清水さんに、渡航準備から、はたまた、空港での動き方、ロサンゼルス空港やサンパウロ空港での、右に曲がって、左に曲がってまで詳しく指導していただきました。そうして、パラグアイ、イグアス空港まで到着し、入国審査官に日本語で「ありがとう」と言われ、清水さんに出迎えていただき、無事到着することができました。到着して最初に目に留まるのは、土の赤さです。それも細かい粒子で、どこもかしこも赤茶けています。到着して早速、清水さんの実験室に案内していただき、日本から持参した *Taq* ポリメラーゼ、プライマー、制限酵素などを冷蔵庫に移し、ほっとしました。このような酵素類を海外まで持っていくのは不安でしたので、それ相応の準備はしましたが、地球の反対側まで持っていくことが出来、地球のどこでも PCR 実験ができることがある程度証明されました。大げさですね。２日目から、実験準備を行い、その合間に、パラグアイ農業総合試験場の病虫実験棟の中や、試験圃場をぶらぶらと歩きました。いやーなんだか、暑い、すでに雪の降った北海道から来た私には、少しこたえました。赤い土、見慣れない鳥、樹木、花、虫が、南米に来たことを実感させてくれました。しかし、研究室にはクーラーが入っており、快適でした。そして、アルゼンチンに行く 11 月 26 日まで、パラグアイのネグサレセンチュウを材料に実験しました。最初はどうしても PCR 産物を得ることができませんでしたが、時差ボケで、夜は眠くなく、昼は仕事で寝れないので、明け方から深夜まで実験し仕事がはかどりました。実験がうまくいかない間、百田さん、串田さんをはじめ北海道農業試験場の方にメールで励ましていただき大変助かりました。E-メールってすばらしいですね。どうにかこうにか PCR の系がうまく動くようになり、パラグアイのダイズ圃場には *P. coffeae* と *P. brachyurus* がいることが分かりました。わたしが訪問したパラグアイ農業総合試験場のあるイグアスは、日系の方の移住地で町

のスーパーでは日本語で買い物ができました。移住地は、私が思うに、ほとんど日本で、海苔巻きや和菓子、にぎり寿司や刺身もあります。若者のカラオケは SMAP や GLAY を歌い、携帯電話を持っていて、私より、日本の流行に付いて行っているように見受けられました。テレビは衛生放送で NHK を見ることができます。そのころは、オードリーが人気でした。さて、あっという間に 10 日間が過ぎて、11 月 26 日からアルゼンチンに向かうことになりました。はじめの 10 日間、僕がただ実験だけしていればよかったのはひとえに清水さんと清水さんの奥様のおかげです。本当に助かりました。

アルゼンチンには、清水さん、清水さんの奥様、清水さんの秘書の窪前さん、私の4人で行きました。まず、パラグアイから車でブラジルを抜けアルゼンチンへ行き、アルゼンチンの空港から飛行機でブエノスアイレスへ飛び、そこからロザリオという都市へさらに飛行機で飛びました。ロザリオは大きな町で、清水さんの奥様と窪前さんと買い物に出ました。買い物はすべてスペイン語なので、窪前さんに通訳していただき大変助かりました。窪前さんのおかげで妻によい土産を買うことができ一安心しました。私がアルゼンチンにいたときに、日本でサッカーのトヨタカップがあり、アルゼンチンのチームが勝ったらしく街は花火を上げ、チームの凱旋帰国はお祭り騒ぎでした。私が訪れたパラグアイ、アルゼンチン、ブラジルは皆さんサッカーが好きそうでした。アルゼンチンのマルコスファレス農業試験場に訪問した際も、我々に向かって「日本でアルゼンチンのチームが勝ったんだ。」とえらくうれしそうに話しかけてきました。このマルコスファレス農業試験場はダイズを中心に研究している試験場です。各地のダイズ畑で、ダイズシストセンチュウが発生しており、困っておりました。ダイズ畑は水平線まで拡がり広大です。7割近く除草剤耐性の組み替えダイズを栽培しておりました。アルゼンチンの線虫研究者に各地を案内していただき、ダイズ圃場からサンプリングさせていただきました。また、毎晩ワインと牛肉をたらふくいただき、日本人との食生活の違いを実感しました。12 月 1 日パラグアイの試験場に戻り、アルゼンチンのダイズ圃場のネグサレセンチュウを解析した結果、*P. neglectus* が生息していました。そうこうするうちに 12 月8日からパラグアイ地域農業センターを訪問して、そこはダイズの育種を担当しているところですが、そこを見学、そして 12 月 10 日からにブラジルに向かい、ブラジル農牧公社ダイズ研究所を訪問しました。そこには農水省国際農林水産業研究センターの研究員が4人いらしてダイズに関する研究を行っていました。また、線虫研究室の研究員に案内されてロンドリーナのコーヒー園やダイズ圃場のサンプリングをさせていただきました。コーヒー園ではサツマイモネコブセンチュウの被害が多く見受けられました。また、ダイズにはダイズシストセンチュウが広く発生していると聞きました。次に、カンポグランデに飛行機で移動し、ブラジル農牧公社肉牛研究所を訪問しました。そこでは牧草が中心ですがサンプリングさせていただき、12 月 15 日パラグアイに戻ってきてブラジルのネグサレセンチュウを解析しました。*P. brachyurus* と *P. zeae* が検出されました。ブラジルの街はクリスマス気分が漂っていましたが、夏なので、何となく違和感があります。また、パラグアイ農業総合試験場では真夏の忘年

会にも参加させていただき、とても楽しい時間を過ごさせていただきました。そして、全ての日程が終了し、気温 35 度のパラグアイを飛び立ち約 40 時間後、雪の降るマイナス 10 度の札幌に到着し、雪かきをしました。

イグアスの滝の前で、清水夫妻と窪前さんと

## インドネシア滞在記

小林義明（静岡県立農林大学校）

1．感動の旅のはじまり

編集担当の水久保さんから依頼され、この文を書くことになりましたが、こうしてパソコンの前へ座ると、ある種の興奮を感じる。それほど感動の多い旅でありました。昨年水久保さんから電話があって、「インドネシアのバンドンで、対抗植物を使ったネコブセンチュウ防除の仕事があるので行かないか」と誘いを受けた。「バンドン」「対抗植物」で私の気持ちはほぼ決まったが、幸い家内と講師を務める農林大学校の許可も得ることができた。

この仕事は 2000 年7月から2ヶ月間、JICA の「インドネシアにおける優良種バレイショ増殖システム整備計画」に参加するもので、病害虫の長期専門家は元長崎農試の片山克巳さんであった。種バレイショ生産で、ネコブセンチュウの被害が目立つようになり、1999 年 11 月からから始まった奈良部孝さん、伊藤賢二さんから引き継がれた仕事で、片山さんからは、すでに対抗植物は生育中で、収穫期の調査を私がやればいいとのことであった。

7月 10 日ジャカルタに着き、翌日、調整員の石川さんと、政府農業局のスロット局長を訪問、報告書を期待しているとの言葉に、期待の大きさを感じた。ジャカルタからバンドンへは車で約4時間、片側4車線の車のあふれた高速道路、道に群がる物売り、切り開かれ尽くされた野山。かたや田舎道の村には子供や大人たちの人影が多く、放し飼いのニワトリや家畜に幼児の頃の風景が重なる。バンドンは、深い緑に囲まれたオランダ風の古都。植民地時代からのものと思われる並木の熱帯樹の大木と、泥んこの川の水。そしてこれからお世話になる、周囲を一望できるホテルの部屋。これらが私の生活のキーワードになった。

2．仕事と生活

月－木曜日は、パンガレンガンの、試験圃場がある西ジャワ州の原原種農場へ往復約4時間をかけて車で通勤、金曜日はバンドン郊外の種子検査所へ往復、午後は市内の州農業部内にあるプロジェクト事務所へ顔を出すことを繰り返した。試験区は計 54 区で、作物は5月に播種され、すでに出穂開花していた。試験、指導、報告書の作成を考えると持ち時間はあまり十分でないことがわかった。3名のカウンターパー

トには、試験遂行と成果の活用への理解を深めてもらうよう働きかけた。実際に調査を分担した農場のアグウスさん、検査所のアヌさんの技術は、専門家の指導と、充実した機材があいまって日本の県試験場並みのレベルのように思われた。私はこの仕事を失敗しないよう試験精度の維持に注意を払い、関係者の積極的な支援を得て、ほぼ満足できる成果が得られたことは幸運であった。この試験をもとに、インドネシア側への線虫対策の提言は、片山さんが青枯病で進めてきた耕種的防除の延長線上のもので、「現行の 1.5 年のナス科作物の休作期間内に対抗植物（ソルゴー（ツチタロウ）またはギニアグラス）および除草休耕を導入し、線虫密度を高めるトウモロコシを輪作作物から除外する」というものであった。また、線虫に対する理解を深めてもらう必要を感じ「線虫の性質と管理」のセミナーを行うことができた。

仕事に向かうドライブは楽しみの一つであった。片山さんや、時々同乗する三木信雄（栽培）さん、アヌさん、運転手のアテンさんとの会話や、車窓の風物から多くのものを学んだ。休日のバンドン市内の散策や、片山さん、フィディオ（種子検査所）さんと行った２度のボゴールも良い想い出になった。

３．インドネシアで考えたこと

バンドンでは、山を切り開いた数千ヘクタールに及ぶ大茶園から生活の隅々に至るまで旧植民地の影を見ることができる。また、日本の経済進出も目の当たりにできる。かつて、日本は、経済は一流、政治は三流といわれたが、三流なのは政治だけではなく、日本人の発想が三流なのでないだろうか。大きな経済力には不釣合いに、私たちの関心は国内志向過ぎるのではないか。農業技術にしても伝統の農薬・肥料中心の柵から抜け出せ得ないでいる。今回、インドネシアへ来て、あれほどの難問であったイネのウンカが、IRRI の耐虫性品種の普及によって解消していることを見て、大きな感動とショックを受けた。インドネシアでは D-D とかテミックが市販されているとも聞いたが、線虫の被害はまだほとんど認識されていない段階のようにも思われる。こんな中で、今回の生物的・耕種的防除の採用は、インドネシアの線虫防除の方向を決める重要な出来事になるのかもしれない。その意味で、技術の継承・発展は重要であるが、それを可能にするシステムを日本は考える必要があると思う。

原原種農場の人達とのお別れ

（片山氏撮影）

［編集後記］

◆会員の皆様には、年の瀬も押し迫り、決算、試験成績の取りまとめなどご多忙の日々をお過ごしのことと思います。熊本大会は今や歴史になりました（これはJONのnewsでよく使われる表現ですね：笑）。25号では、事務局から熊本大会の報告を戴きました。また、中央農研に依頼研究員として在籍した日本園芸生産研究所の熊谷さん、栃木県の九石さんに自己紹介も兼ねて大会参加の感想を戴きました。本大会は面白い研究が多数発表され、質疑も活発でした。抜けるような青空の下で行われた現地見学も実のある内容で参加者に満足していただいたようです。学会事務局と大会事務局を兼務するというハードな条件の中で学会を切り盛りされ、見事に成功させた九州沖縄農研の佐野さん、岩堀さん、立石さん、大変ご苦労さまでした。また、大会運営にご協力を惜しまれなかった熊本県の古賀さん、小牧さんにも感謝いたします。

線虫分野では、これまでも数多くの国際貢献が行われてきました。帰国後かなり時間が経過した仕事もありますが、ニュースではあまり古くならない内に会員の海外経験をできるだけ紹介していきたいと思います。今号では、植原さんからパラグアイ、小林さんからインドネシアの経験をご紹介いただきました。これらの記事は会員の国際貢献の貴重な記録だと考えております。これからも、海外記事の掲載を続けたいと考えております。それでは、良いお年をお迎え下さい。

（水久保隆之）

◆私は風邪でグロッキーでしたが、なんとか仕事納めまでには25号を皆様の下にお届けできそうです。年も押し迫った忙しい中、原稿を寄せていただいた方々に感謝感謝です。来年もご協力お願いします。

（吉田睦浩）

2001年12月20日
日本線虫学会
ニュース編集小委員会発行
編集責任者　水久保隆之
（ニュース編集小委員会）

農業技術研究機構
中央農業総合研究センター
虫害防除部線虫害研究室
〒305-8666
茨城県つくば市観音台3-1-1
TEL：0298-38-8839
FAX：0298-38-8837
E-mail：mizu@affrc.go.jp

日本線虫学会ニュース第25号
ニュース編集小委員会
水久保隆之（中央農研）
吉田　睦浩（農環研）

入会申し込み等学会に関するお問い合わせは、学会事務局：農業技術研究機構九州沖縄農業研究センター線虫制御研究室まで

〒861-1192
熊本県本県菊池郡西合志町須屋2421
TEL：096-242-7734
FAX：096-249-1002
E-mail：iwahori@affrc.go.jp